
「死者を見送る者のためのミサ」としてのフォーレ《レクイエム op.48》

—「怒りの日」の省略を同時代の死生観から解釈する

林 直樹 (一橋大学)

本研究はガブリエル・フォーレ(1845～1924)の《レクイエム op.48》を、同時代の死生観の研究を踏まえ、「死者を見送る者のためのミサ」として考察することを目的とする。

作曲家は通常、グレゴリオ聖歌の「死者のためのミサ」の歌詞や旋律をもとにレクイエムを作曲する。その際に歌詞の取舍選択が行われるのだが、続唱(セクエンツィア)に含まれる「怒りの日」はレクイエムに必須であるとする傾向があり、独立した楽章として作曲されることが多かった。また「怒りの日」の歌詞は「最後の審判」を内容として扱っているため、作曲される音楽も死の恐怖を表現したものとなるのが通例であった。一方フォーレは「怒りの日」を独立した楽章として扱わず、全体としても劇的な表現が少ないレクイエムを作曲した。結果として《レクイエム op.48》は「死の恐怖を表現したものではなく、異教徒的である」という批評を受けた。フォーレは批評に対し「私は死を苦しみで満ちた移行というよりも、むしろ幸福や解放であると感じている」と述べている。この発言から《レクイエム op.48》にはフォーレの「個人的な死生観」が反映されているとされてきた。しかしフォーレの個人的な死生観だけでなく、19世紀末から20世紀初頭にかけてのヨーロッパにおける死生観を俯瞰すると、《レクイエム op.48》の新たな側面を見ることができる。

ヨーロッパにおける「死」の概念やその変遷を、歴史学の見地により確認する。フィリップ・アリエス(1914～1984)は19世紀における遺言状の内容の変化や19世紀末の文学作品を分析し、人々にとって恐れられる死が「己の死」から「汝の死」へ移行したと述べている。つまり死が、他界する者ではなく「残された者たちにとって」重要な意味を持つようになったことを示唆している。「死に関わる存在としての人間」の概念を考察したマルティン・ハイデッガー(1889～1976)も、死についての鎮静は臨終の人だけでなく、「慰め役」にとっても気休めなのであると述べている。これらの観点からレクイエムを再考する。レクイエムの本来の意味は「死者のためのミサ」であるが、それは「死者を見送る者のためのミサ」でもあると言える。「死者を見送る者のためのミサ」という捉え方でフォーレの《レクイエム op.48》を解釈すると、「己の死」に関わる問題である「最後の審判」、その歌詞を含む「怒りの日」のセクションが省略されていることの意味を新たに見出すことが出来る。本発表にて、フォーレの《レクイエム op.48》の新たな解釈、およびレクイエムが死者のために行われる儀式を超えた、「死者を見送る者が自らを慰めるための作品」という概念をも内包していることを提示したい。